

人と人、人と地域との つながりのあり方を垣間見た2年間

客員研究員 三好 康午 (JA全農えひめ)

はじめに

平成22年4月、公益財団法人えひめ地域政策研究センター（以下、センター）へ赴任して以来、主にまちづくり、地域おこしに関わる業務に二年間従事してきました。

まちづくり、地域おこしというのは、一言で言い表すにはあまりにも多様でスケールが大きく、二年間でそのすべてを学ぶなど到底できませんが、短い期間で業務に従事しながら私なりにしてきたこと、考えたことを綴ります。

情報誌の制作業務に携わって

多くの方々に原稿の執筆でご支援を頂きながら、センターの情報誌である、「舞たうん」には二度制作に携わりました。

一度目は、「グリーン・ツーリズム」が特集のテーマでした。我が国は今「地域の時代」、「地域主権」などといわれ、地域のことは地域に住む住民が決める地域住民主体の風潮にあり、この時流に乗るグリーン・ツーリズムが地域で、どんないきさつで立ち上げられ、どんな課題



自ら制作に携わった舞たうん

を抱えつつ取り組まれ、今後どんな展望を抱いているのか、実際に携わる団体の取り組み事例を紹介しました。

二度目は、「地域づくりに取り組むNPO法人」がテーマでした。昨今の価値観が多様化した地域・社会のニーズに対応する地域密着型のNPO法人について、実際に活動する団体の取り組み事例を紹介しました。

これらの誌面制作を通じて、以前は「グリーン・ツーリズム」や「NPO法人」というキーワードしか知らなかったことの、地域おこしに取り組む人々や団体の実情を垣間見る機会を得たことは有意義でした。

えひめ地域づくり研究会議の事務局を担当して

えひめ地域づくり研究会議の主な事業で年一回開催される年次フォーラムの事務局を二度務めました。

年次フォーラム2011は、「継続する力 ―地域の自立のために―」をテーマに、地域づくりに携わった方々の情熱や思いを聴講しました。その話に「地域に何もない」といって嘆くが、必ず地域には地域資源があり、それが何か考えれば何でもできる、「基本的にもないのだから新たに創ればいい」とありました。

このことは、これまで豊かで恵まれた社会に慣れた私にとって、今後は我が国の経済に明るい見通しもない中、極端に言えば「何も無い」ような社会におかれても、どう暮らしていくかの指針になると思われました。

年次フォーラム2012は、震災からの復興の最中で、「絆」ということに世間の関心が向く中、「いつまでも、安心して暮らせるまちづくり ―復興・復活 更なる発展のためのコミュニティづくり―」をテーマに開催されました。

基調講演では、「我が国の認知症や障害者、ニートなど様々な課題を抱えた「社会的弱者」が増加する中、これからの地域づくりは、この人達も担い手として一緒にやっていく構造にしなければならない」との話がありました。今後そのような社会構造が現実となり、その社会の中で自らが「社会的弱者」の立場になった時どうするのかを考えさせら

れる講演でした。

グリーン・ツーリズムを体験して

「地域再生実践塾」の研修で、和歌山県田辺市上秋津にて農家民泊などグリーン・ツーリズムを体験しました。

この地域は、主産業が柑橘や梅など農業でしたが、近年隣接の農村、市街地から人口が流入、農地の宅地化が進むなど地域の環境が変化し、新旧住民の交流、人口増加対策として地域づくりの機運が高まっていました。

活力ある郷土づくり、香り高い農村文化社会を目指して「秋津野塾」などの組織が結成され、地域資源を活かすシステムとして、農産物直売所「きてら」や旧小学校跡を活用しグリーン・ツーリズム事業を営む「秋津野ガルテン」、放牧園を復活させ

せた市民農園などグリーン・ツーリズムで地域おこしに取り組む状況を視察しました。

私はJAの職員であり、宿泊先の農家の方とは、農業経営や果樹の栽培について深夜まで話が弾み、ネットワーク構築の良い機会を得ました。この研修は、農村環境のあり方として今後の仕事にもヒントとなることが多く、有意義でした。



旧小学校跡を活用しグリーン・ツーリズム事業を営む「秋津野ガルテン」

おわりに

地域おこし、まちづくりへの取り組み事業は、我々の生活と密接に関わっていて、どんな立場の人も無縁ではありません。

私達は、昨今の少子高齢化、単身世帯の増加で、人とのつながりが希薄となり、集落も共同体として維持機能が困難になりつつある社会で暮らしています。この状況下で、今後自らがどう人や地域と結びつき、共に暮らせば良いかを、様々な業務を通じて考えさせられた2年間でした。



えひめ地域づくり研究会
年次フォーラム2011、2012